

お互いの妹で

～知らない妹の顔を見た日～

待宵草

篠原蓮(しのはら れん)

会社員。真面目で落ち着いた性格の持ち主。
幼馴染の颯とは家族ぐるみの付き合いが続いている。

篠原澪(しのはら みお)

蓮の妹。少し甘えん坊で誰にでも親切な、人懐っこい性格。

水瀬颯(みなせ そう)

蓮の幼馴染。フリーランスエンジニア。明るく軽いノリの持ち主で、誰とでもすぐ打ち解けるタイプ。

水瀬柚(みなせ ゆず)

颯の妹。黒髪ロングが印象的な、清楚で真面目な性格。

その日はたまたま仕事が半休になった。

半休になってもやることはなく、休日は長蛇の列になっているラーメン屋のラーメンを食べて家に帰った。

いつもと同じ帰路、見慣れた風景を横目に俺は家に帰った。

いつもと同じ家、その玄関を開けると見慣れた靴があった。

幼馴染で親友である颯の靴だった。

「俺の半休でも予知して遊びに来たのか？」

そんなことを思いながら俺はリビングに向かった。

リビングに向かうと2階の方から床が軋む音とかすかな女性の声が聞こえた。

気になったので階段を上ると音はどうやら妹の部屋から聞こえてるようだった。

澪は俺の妹だ。運動が好きで部活動はテニスをしていくくらいだ。148cmと身長は低いが出るところは出ていて健康的な身体をしている。

俺は音のする妹の部屋の扉を少し開けた。

扉の隙間から差し込む光の中に、上半身をあらわにした澪がいた。その対面には颯がいた。

いつも俺の後ろをちょこちょこついてきた妹が。

今は颯に胸を舐められてて、肩を震わせながら甘い声を上げている。

俺の知らない表情で。俺の知らない声で。扉の隙間から差し込む光の中で、颯の頭が動く。

澪の豊かな白い膨らみに、颯の顔が埋まっていた。

チュパ、と湿った水音が廊下まで届く。

俺の呼吸が止まった。肺の奥に溜まった空気が、鉛のように重い。

颯の舌が、濡のピンク色の先端を転がすように舐め上げる。

「んっ……」

濡の喉から、甘えたような高い声が漏れた。

俺の喉が小さく鳴る。無意識に飲み込んだ唾液が、熱い筋を作って落ちていった。

止めに入るべきかという葛藤が胸をよぎったが、床に縫い付けられた足はピクリとも動かない。

颯が舌先で突つくたび、濡の小さな背中がしなやかに波打つ。

俺の知らない濡の声が、狭い部屋に反響していた。

次第に颯の大きな手が、濡の豊かな白い胸を形を変えるように揉みしだく。

「あっ、そこ……だめっ……」

漣が自分の口元を手の甲で押さえながら、甘い悲鳴を漏らす。

その顔は真っ赤に染まって、いつもの無邪気な笑顔とは別人のようだった。

恥ずかしがっているくせに、漣の腰は颯の太ももに無意識に擦り寄っている。

颯はそんな漣の反応を楽しんでいるように、口元を緩めて耳元に唇を寄せた。

「何がだめなの？漣、もっと声聞かせてよ」

颯の指が、漣の滑らかな太ももをゆっくりと撫で上げ、徐々に漣の秘部へと近づいていく。

漣の肩がビクンと跳ね、細い指がシーツを強く掴んだ。

「ひゃうっ……！ああっ……！」

背中を弓なりに反らせ、滯が抑えきれない声を上げる。

その声が廊下の暗闇に突き刺さり、俺の喉の奥で乾いた音が鳴った。

颯の手が滯の秘部に触れると、滯の小さな身体は小刻みに震え、ポロポロと涙をこぼして快樂に抗えなくなっている。

俺の目の前で、大切な妹が親友の手によって完全に女の顔に変わっていく。
肺の中の空気が全部抜けたように息が吸い込めず、ただその光景を網膜に焼き付け続けることしかできなかった。